

PRESS RELEASE 2015年8月

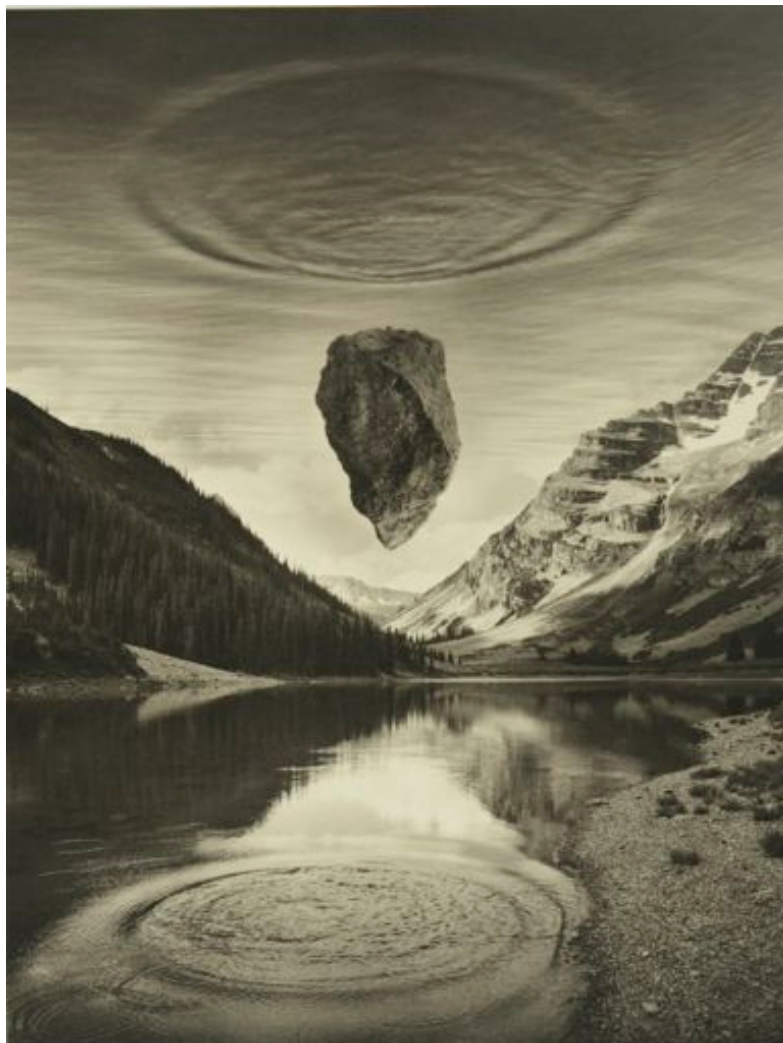
清里フォトアートミュージアム (K・MoPA)
展覧会開催のお知らせ

プラチナ・プリント収蔵作品展：
永遠の時、きらめく

From the Platinum Print Collection: Glittering Through Eternity

会期：2015年10月10日（土）～11月30日（月）

K・MoPA
開館20周年
記念展



ジェリー・N. ユルズマン 《無題》1991年 プラチナ・プリント

Jerry N. Uelsmann, *Untitled*, 1991 ©Jerry N. Uelsmann

■開催概要■

展覧会名：プラチナ・プリント収蔵作品展：永遠の時、きらめく

会 期：2015年10月10日(土)～11月30日(月)

休 館 日：毎週火曜日（ただし11/3は開館）

開館時間：10：00～18：00（入館は閉館30分前まで）

入館料：	一般	800円（600円）	学生	600円（400円）
	中・高生	400円（200円）	友の会・会員	無料
	（ ）内は20名様以上の団体料金		家族割引	1200円（2名以上～6名様まで）

交通のご案内 車にて：中央自動車道須玉I.C.または長坂I.C.より車で約20分

J R：中央本線小淵沢駅にて小海線乗り換え 清里駅下車、車で約10分

清里フォトアートミュージアムは、

写真専門の美術館として、1995年に開館いたしました。

三つの基本理念：

1. 生命(いのち)あるものへの共感
2. プラチナ・プリント作品の収集と技法の継承
3. 若い力の写真：ヤング・ポートフォリオ

に基づいた展示・収集活動を行っています。



本年は、清里フォトアートミュージアム開館20周年にあたります。2014年より、三つの基本理念に基づいて下記の20周年記念展を開催しています。

1) 若い力の写真：ヤング・ポートフォリオ

- ▶▶ 「原点を、永遠に。」 2014年8月 (会場：東京都写真美術館)
- ▶▶ 「2014年度ヤング・ポートフォリオ」 2015年3月21日～6月21日
- ▶▶ 開館20周年記念特別企画「写真による社会貢献の顕彰」受賞者・楊哲一氏(台湾) 2015年5月23日

2) 生命あるものへの共感 ▶▶ 「未来への遺産：写真報道の理念に捧ぐ」 2015年7月1日～9月30日

3) プラチナ・プリント ▶▶ 「プラチナ・プリント収蔵作品展：永遠の時、きらめく」

2015年10月10日～11月30日

■開催趣旨■



当館は、基本理念のひとつとして、古典技法のひとつである「プラチナ・プリント」に着目し、重点的に作品を収集してまいりました。本展はすべて、当館の収蔵作品で、プラチナ・プリントを発明したイギリスのウィリスの作品から、現代作品までの約130点を展示いたします。

現在、写真と言えば、デジタル画像をイメージする方がほとんどとなっているのではないのでしょうか。デジタルカメラが発明されたのは1975年。その進化と普及のおかげで、幅広い層が、手軽に写真を楽しめるようになりました。写真は、パソコンやスマートフォンのモニターで画像として見るもの、出力するためのデータであり、電子メディアと認識されているのが現状です。そのため、この20年の間にも、フィルムや印画紙の種類は大幅に減りました。しかし、全く生産がストップするという事は無く、むしろ、フィルムの持つ味わいや、印画紙ならではの深みが、デジタル画像に慣れた世代の目に、今、新鮮な印象を与えているようです。

近年では、多くの著名な写真家が、過去に発表した代表作を、あらためてプラチナ・プリントに焼き直して発表するということが行われています。作家も、愛好家も、プラチナ・プリントの持つ階調の美しさや気品に惹かれ、この古典技法に熱気が集中しているのです。このことも、本年、当館がプラチナ・プリント収蔵作品展を開催する理由のひとつです。

本展のタイトル「永遠の時、きらめく」は、プラチナ・プリントの特徴である保存性の高さと、ルーペで表面を見たときに、実際に見える煌めきを表現しています。

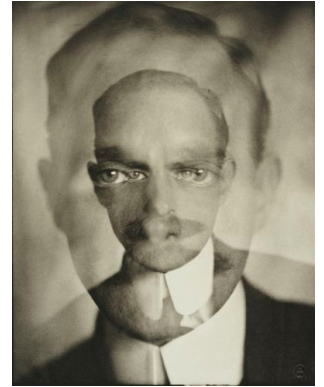
作品上) クラレンス・H. ホワイト《チャールズJr.とアリーナ・リープマン》1910年頃

作品右) アルフレッド・スティーグリッツ《マリー・ラップの肖像》1914年



プラチナ・プリントのもうひとつの特徴は、優美な色調と黒の美しさです。マットな紙の表面に、まるで墨の粉を盛りつけたような、また、吸い込まれる闇をイメージさせる漆黒があるからこそ、ハイライトの白が際立ってくるのです。

プリント表面のテクスチャーは、ベルベットのような、なめらかな質感を湛え、ルーペで表面を拡大して見ると、紙の繊維の中に定着した鉱物が光を反射して、キラキラと煌めいています。この光がプラチナ・プリントの証なのです。本展会期中、皆様にご覧いただけるよう、ルーペとプリントの見本を会場にご用意いたします。



アルヴィン・ラングドン・コバーン
《マリウス・デ・ザヤスのヴォートグラフ》1912年頃
©Alvin Langdon Coburn

■プラチナ・プリントの特徴■

① 鉄塩の感光性を利用し、プラチナやパラジウムを使用して焼き付ける写真の古典技法のひとつです。

② 黒の締まりに優れ、同時に白から黒までの階調の幅が豊かで、非常に微妙なグラデーション表現が可能です。

③ 画像は引き伸ばし（拡大）することが不可能ですが、ネガと印画紙をピッタリ密着させて焼き付けるため、ディテールが失われず、細部の描写に優れています。
(ただし、近現代においては、拡大ネガやデジタルネガの制作も可能となっています)



④ すべての写真技法の中で保存性が最も優れており、画像は劣化・退色しません。

カール・ストラス 《2番街の高架から見た
コンソリデイテッド・エジソン社、ニューヨーク》1912年頃
©Karl Struss

■世界最古のプラチナ・プリントを展示■

プラチナを印画に使用する試みは、ダゲレオタイプやカロタイプと呼ばれる写真術が誕生した1839年よりも早く、1831年からイギリスにおいて行われていました。そして、プラチナの印画紙が世に登場するのは、ウィリアム・ウィリス・ジュニア（英）が発明し、特許を取得した1873年です。

右の写真は、今から約140年前の1878年、ウィリアム・ウィリス・ジュニアが、英国王立写真協会にて技法を発表するために制作したプリントのうち一枚です。《田舎の小屋》(Rustic Cottage)と題された画像の下には、「1878年12月、イギリス写真協会誌に発表する前に現像した」との記載があります。



*1878年は明治11年。

ウィリアム・ウィリス・ジュニア 《田舎の小屋》1878年

■プラチナ・プリントの歴史と復活、そして現在■



19世紀から20世紀初頭までは、ウィリスの発明・特許を有した既成の印画紙が市販されていました。しかし、第一次大戦時にプラチナが軍需産業の重要な金属として使われ、また、物資が不足している時に、美術的興味だけで貴重なプラチナを使うのは国賊であるとまで言われ、急速にプラチナ・プリントは消えて行きました。

ルース・バーンハード 《砂丘》1967年 ©Ruth Bernhard

二つの大戦後は、銀塩の感度の高い印画紙（ゼラチン・シルバー・プリント＝モノクロ印画紙）が作られ、比較的簡単に現像できる、引き伸ばしができる、安い大量生産が可能という点から、人々の関心は銀塩へ移ってしまいました。

1970年代に入り、アメリカの写真家アーヴィング・ペンが、プラチナ・プリントの美しさに魅了され、試行錯誤の結果、自身の作品をこの技法で制作しました。現代的な息吹を与えられ、プラチナ・プリントは見事に復活したのです。20世紀初頭のような市販の印画紙はありませんが、プラチナ・プリントの手法を蘇らせ、薬剤を調合・塗布して、印画紙を作ったのです。現在も、プラチナ・プリントは、手塗りの印画紙に露光・現像する方法で、写真家本人や、専門のプリンターによって制作されています。



ルイス・ゴンサレス・パルマ《無題》1988年

©Luis González Palma

■カメラの変化とイメージの違い■

現在使われているような小型カメラが生まれたのは1920年代。小型カメラとロール状の35ミリフィルムによって撮影は劇的にスピードアップし、「スナップ」を可能にしました。さらに、デジタルカメラは暗さにも強く、撮影後の処理やアウトプットのスピードアップを可能としました。

一方、本展でご覧いただくプラチナ・プリントの多くは、大型カメラで撮影したものです。大型カメラは、撮影までにどうしても時間がかかります。光の具合を見、被写体と対話するなど、じっくり向き合ってから初めてシャッターを押すことになります。スピードを優先する写真と時間をかけて作られる写真。プロセスの違いが、イメージに何をもたらすのかという部分にも注目して、ご覧いただければ幸いです。

デジタル画像が、写真を身近なものにした一方で、一瞬で消滅してしまう危うさや、ハードやソフトウェアの激しい進化の中において、二度と再生できなくなるリスクを持っています。しかし、プラチナ・プリントなどの古典技法は、薬剤さえ手に入れば「自分で作る」ことのできる写真であるということも、作り手にとっては魅力的な要素です。中でも、プラチナ・プリントの画像は、長い時間を経ても劣化・退色せず、永遠に残ります。それは、多くの写真技法の中でもプラチナ・プリントだけが持つ特質です。

100年前に写された時間が、そのままの姿で目の前にある——それは奇跡的なことと言っても過言ではありません。そのために、わたしたちは、プラチナ・プリントに焼き付けられた写真が纏う凛とした空気と、凝縮された時間の気配に、深く魅了されるのでしよう。

暖かみのある風合い、ベルベットのようになめらかな質感、優美な色調のプラチナ・プリント。この類い希な技法による豊かな写真表現の歴史と名作をどうぞじっくりお楽しみください。



ハミド・サルダール＝アフカミ

《ワシと馬を調教するカザフ人、デルーン地、バヤンウルギー県（モンゴル）》2008年

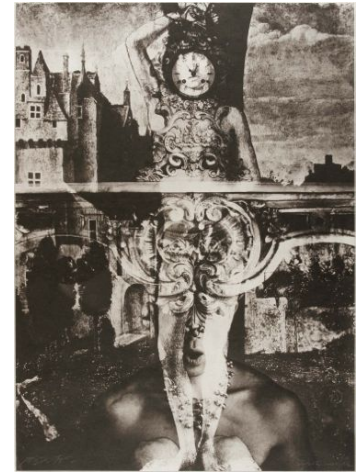
©Hamid Sardar-Afkhami

■主な出品作家■(ABC順)

マヌエル・アルバレス・ブラボ / アルヴィン・ラングドン・コバーン / ロイス・コナー / エドワード・S.カーティス / ロベール・ドマシー / ピーター・ヘンリー・エマーソン / フレデリック・H. エヴァンズ / ルイス・ゴンサレス・パルマ / 原 直久 / 細江英公 / 井津建郎 / ガートルード・S. ケーゼビア / ティナ・モドゥティ / アーヴィング・ペン / エドワード・スタイクン / アルフレッド・スティーグリッツ / ジェリー・N. ユルズマン / エドワード・ウエスタン / クラレンス・H. ホワイト

プラチナ・ プリント・ ワークショップ

当館では、プラチナ・プリント作品の収集だけでなく、技法の継承を目指し、毎年**プラチナ・プリント・ワークショップ**を開催しています。手作りの印画紙に写真を焼き付け、現像する。フィルムに触れたことのない方も、写真の原点を体験することで、写真の新しい見方、あるいは表現世界の広がりを得ることができるでしょう。当ワークショップを通して、プラチナ・プリント技法を会得し、世界を舞台に活躍する作家も



細江英公《薔薇刑 作品29》1962年

©Eikoh Hosoe

出ています。

あなたもプラチナ・プリントに写真を焼き付けてみませんか？“永遠に残る写真”をお持ち帰りいただきます。

本ワークショップでは、①当館収蔵のプラチナ・プリントを鑑賞、②館内のスタジオで、講師があなたのポートレイトを撮影、③水彩画用紙に感光乳剤を塗って印画紙を作り、④ネガを紫外線で露光し、⑤現像します。

暗室作業は初めてという方も、作品制作に取り入れたいという方も、講師の細江賢治先生が丁寧に指導します。

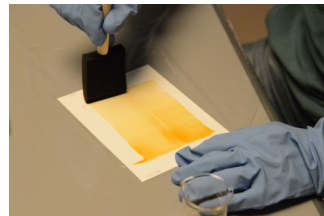
◎日時：11月7日・8日（土・日）2日間

●講師：細江賢治（写真家）

●参加費：30,000円（入館料を含む）
友の会・会員は27,000円

●定員：8名 要予約

*参加申し込みは、10月31日までに、ご住所・お名前・参加人数をお知らせください。



K・MoPAで 星をみる会

K・MoPA恒例、星の美しい清里ならではの秋の観望会です。秋の星空について、また天文学における最新の話などを専門家にお話いただく少人数の気軽な催しとして「いつか行ってみたい」というお声も頂戴しています。

今年の開催日、11月15日は、夕方なら三日月が、月が沈むとアンドロメダ銀河を見ることができます。雨天の場合もレクチャーがございませぬ。講師の梅本智文先生は東北大学卒の理学博士で、K・

MoPAの講師としてお迎えするのはなんと9回目。毎回テーマを変えて

お話くださいます。天文ファンも初心者も、そしてリピーターの方も大歓迎です。どうぞふるってご参加ください。

◎日時：11月15日（日）午後5時～7時

●講師：梅本智文（国立天文台 野辺山宇宙電波観測所 助教）

●参加費：1,000円（入館料を含む）/友の会・会員は500円

●定員：15名 要予約

*参加申し込みは、11月14日までに、ご住所・氏名・参加人数をお知らせください。



お問い合わせ

●本展に関するお問い合わせ・掲載用画像データについては、事務長・小川、広報・前島までお願いいたします。

ogawa@kmopa.com Tel:0551-48-5598

●ホームページ <http://www.kmopa.com>

ツイッター <https://www.twitter.com/kmopa>

facebook <https://www.facebook.com/kmopa>

〒407-0301山梨県北杜市高根町清里3545-1222 清里フォトアートミュージアム

Tel: 0551-48-5599（代表） Fax: 0551-48-5445 info@kmopa.com